
閉じた環

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉じた環

【Nコード】

N7695T

【作者名】

そら

【あらすじ】

それなりに現実的で、今どきの女子高生である春。いつものように、いつも通りに普通に日常が過ぎていく。平凡で退屈な日々、それがどれほど輝かしく大事なもののなか、私は知らなかった。

過去が私を追いかけてくる。
けれど私は私だけのもの。
絶対にそれだけは譲らない。

逃げてみせる。

第1話 いつもの日常

授業終了のチャイムであわてて起きて、うーん、と手を上にあげて大きく伸びをする。

それに教卓の五十にもうじき手が届くという男性教諭は、別段咎めるわけではなく、さっさと教室を出ていく。

やる気のない生徒に、やる気のない教諭、ここは進学率もそこそこ、同じようにフリーター率も就職率もそこその、三流どころの上の方に位置する公立の女子高。

校舎の窓からは遠く太平洋の海が見渡せ、晴れた日にはキラキラと輝いて見えるまばゆい波の照り返しや、潮騒もかすかに聞こえる高台に位置していた。

とはいってもその景色に感動したのも入学間もない最初の1、2か月ぐらいまでで、今はその感動もちよいと薄れてしまっている。

何事も「慣れる」という悲しい証拠の一つだ。

私は隣の席の田中洋子の未だ眠りこけてる頬っぺをピンピンと指でつつき、

「起きろー、おっきろー！お昼だよー。」

と声をかけた。

まあこの時間、バイトまみれの私達には、特に数学1という授業は

悪魔のゆりかごになるわけで、ちらほら教室を見渡しても、撃沈したままの姿の方が多い。

教師たちはやる気のない私達には何も望まない。

私達もそれをきちんとわかってて、お互いこうしてなあなあとやっているわけだ。

高校1年ともなれば、クラスの中も学年の中も綺麗にすみわけがなされていて、幼いときのようなぶつかり合いもない。

この気薄と呼ぶにふさわしいクラスメートたちとの立ち位置が私は好きだ。

寂しい？それはない、皆それぞれ抱えているものが違うのに、濃い関係を作ろうと思うほど今の私はマメじゃないから。

親しい友人の一人二人がいて、放課後その時々遊ぶメンツがいて、それで充分楽しい事にかわりない。

私はこの気楽な軽い空気の中を漂うのが好きだ。

「おーい、ヨッコちゃん、購買にいくよお！おいてくよー、今日の限定コロツケパン売り切れちゃうよー。」

そう声をかければ我が友人はガバリと机に伏していた顔をあげ、そのままガタンと立ち上がる。

「みっちゃん、いくよ！」

みっちゃん？誰よ、それ？いつも適当に名前を呼んでくる彼女に、それに何か意味があって毎度毎度適当に名前を呼ぶのか聞いてみたい。

けれど彼女はそう言って私を振り返る事もなく、寝ていたのが嘘のような身軽さでひらりと駆け出していく。

クラスメートのお弁当持参組が手をひらひらと振りながら、無責任にも

「がんばれ。」

との声援を受けて、私もそれにゆるく手を振りながら、駆け出す洋子の後をおいかけていく。

どうも私はこのクラスではボケのゆるキャラだと思われている節がある。

何故に？入学してからの数々を思い起こす。

きつと先ほど駆けていった猪突猛進女の印象が強いせいなんじゃないだろうか？

一度ここらでそれを訂正したい、そう思っているのだけれど、毎回こういう展開のまま終わってしまって、未だそれをなしとげていない。

私は恒例の購買の販売へと猛ダッシュする洋子の後を追いかけるが、教室の窓から見える明るい海の色に、もうじき夏がくるなあ、と、ふと思った。

私、広瀬春の高校生活は可もなく不可もないけれど、それなりにその年頃の女の子らしく明るさに満ちていた。

これからもそれが当たり前に続くものだと思っていた。

第2話 楽しい我が家

「ただいま」

私は庭先を横切って、いつものように縁側から家に入る。

いまどき縁側がある家って貴重だね。

私はこの小さな庭と、この縁側のある家が大好き。

6歳からこの家に住んでいるけど、この縁側でほとんど過ごしているっていいくらい。

物騒だという人もいるけど、四方を開け放っているこの空間が、一番落ち着くの。

縁側に猫はつきものというけど、残念ながら猫はいない。

私が猫が苦手だから。

あれは異界の生き物に違いない、うん、絶対そう。

「おや、春、またあんたって娘は庭先から入ってきて。」

「もう学校から帰ったの？今日は早いね。さあ、とっとと制服を着替えておいで。」

私は制服のまま縁側で寝転がっていたけど、お婆ちゃんのその声に、どっころしょって立ち上がった。

お婆ちゃんはそんな私を見て、また何か小言をいいそうにしていたので、触らぬ神に祟りなし、とばかりに自分の部屋に退散した。

私はこの母方のお婆ちゃんちで6歳の頃から世話になっている。

この平屋建てのこじんまりとした庭に囲まれた家で二人暮らしだ。

生活費は毎年まとめて父から振り込まれている。

半年前の、どこの労働組合だという賃上げ交渉は、父の全面的妥協の末めでたく大幅のアップになった。

だってねえ、高校生ともなれば、こづかいアップは当たり前だよ。

勿論、駅のそばのファミレスで週に三回ほど夜の10時までアルバイトはちゃんとしている。

けれどそのバイトもそろそろ他をみつけないとマジに思っている。

何せその店の30代の店長、女癖が悪くて、バイトの子にすぐちょっかいをかけてくる。

一応子持ちの妻帯者だよ、まったくあきれてしまう。

で、その店長はバイトの古株の女子大生とくっついてるわけ、絶賛不倫中。

そして、その子のうざいこと、うざいこと、誰があんな男相手にするかってーの。

うちら女子高生組の3人のバイトに、それはそれは良い態度で毎度からんできてくださるわけで。

誰もあんな不誠実な男いらんちゅーのに嫉妬の嵐なの。

マジであほらし。

それよりうちに隙あらばちょっかいかけてくる、あのバカ店長を何とかしてくれって思う、頼むからさ。

だからここのバイトもそろそろやめようか、って思ってる、バカくさいし。

初めての夢見たバイトがこれだもん、なえるよね。

だけどね、我が友人のヨッコちゃんいわく、こんなからかいがある人間がいるバイトやめるのはもったいない、そうおっしゃるわけ。

うん、女子高生組みのその2は我が友人でありクラスメートの田中洋子なの。

この友人、くだんの女子大生とバイトがかぶると、いつもは冷たくあしらう店長に、態度をころっとかえ、「いやだあく。店長ったら」。」な感じに受け答えもガラっとかえてしまう。

それで女子大生をあおるあおる、ボウボウと。

・・・私の女子大生さまから受ける嫌がらせは、どう考えてもヨッ

コちゃんに原因がある気がするんだけど？どうよ、これ。

私、友人選ぶの間違ったっぽいよね、今さらだけど。

今日はバイトの日で6時から入る。

私はシャワーを軽く浴びて、軽食をとってバイトに行くギリギリまで、縁側に座り遠く空をみつめる。

こうしていつも通りの日々が続くと思っていた。

バイトから帰ってからパソコンで遊んでいた時、そのメールがきた。

誰からかを見ると、年に1度か2度くる古い友人からのそのメールには、あるサイトを開け、と書いてあった。

私はそのままサイトを開いた。

それは、海外のある有名な連続誘拐殺人犯についてのサイトの一つだった。

この殺人鬼は一部熱狂的なファンが多く、このようなサイトは星の数のようにある。

私はなんで？と疑問に思いながら、そのサイトを開いた。

そこにはその殺人鬼のおかしたと思われるわかっているだけの範囲ではあるが年表などが作られており、別段目新しいものはないように見えた。

だがわざわざ送られてきたメールに何もないはずがない。

念入りにそのサイトを調べて見つけた。

それは掲示板形式のもだったが、新たな都市伝説として語られていたもので、我らの殺人鬼の復活では、という内容のもだった。

ここ数か月でかの殺人鬼にかかわった人間が1人、また1人と行方不明になっている、というものだった。

それぞれ違う人間が書き込んでいた。

私はこのメールを送ってきた人物を思い浮かべた。

その行方不明になっているという人物の実名は上がっていなかったが、その幾つかの地名は心あたりがある。

ただの偶然か、それとも……じわりじわりと腹の底に黒い不安が渦巻く。

かの友人も不安に思っただけメールをよこしたんだろう。

けれどこの殺人鬼は特別刑務所に収容された後、自殺をしたと発表されて、この遠い日本でも数年前にワイドショーを騒がせたはず。

ありえない、どうせいい加減なあまたある与太話しだとメールを返して安心させたい。

けれど、幾つか出ている地名が、私の不安をあおる。

念のため、そう念のためだと言いつつ聞かせながら、私は可愛い兎の絵をつけて、その古い友人のメールに送り返した。

こんな遠い日本にいるのに、その夜はなかなか寝付けなかった。

第3話 胎動

私は毎夜メールをかかさずチェックしたが、あれ以来することはなかった。

最初はいろいろ考えて不眠がちだったけど、もうひと月近く過ぎた今、その不安も日常の中で埋もれつつあった。

それよりも夏休み前の期末テストもあり、友人たちとテスト勉強に追われていた。

キンコンカンコンとテスト終了のチャイムになる。

やった！もう何はともあれ、結果など、うん、あまり考えまい、やっとなんかテストから解放される。

何と言う開放感、心なしか冷房のきいていないこの教室も、今日は爽やかに感じる。

みんなでワイワイお昼をどこで食べようか、と騒いでいると、ヨッちゃんの鶴の一声で、カラオケでランチにしよう、となった。

まあ、いいか、あそこのカラオケはドリンクバー無料だしなあ、話しがまとまり総勢8人で高校の傍のカラオケ屋に繰り出す。

最近はやりのグループの曲を皆で二チームにわかれ、振り付けつき

で歌い得点を競争する。

負けた方が料金を払う、という事になったので、そりゃあもう頑張るしかない。

制服のブラウスをクルクルとまるめて裾で縛ってきっちりヘソだしスタイルにする。

何せうちのチームは腰をくるくる回して歌うグループの歌担当チームになったからね。

その真似っことも大事だ。

女ばかりとあって、胸の際どい所までブラウスをあげて、やる気アピール。

ふふくん、私のこの腰のキレをみよ！とばかりに私も踊りながら歌った。

こんな時は女ばかりの大騒ぎの方がとても楽しい。

ヨッコのところは、反対にかわいい女性グループの担当だ。

同じく振りもばっちり決めてくる。

私達は、はちゃめちゃカラオケを楽しんでいた。

私もポッキーを食べながらおかしくて涙まで出る始末。

それを見ている、防犯カメラを動かしてみている人間がそばにいる

事など全然知りもしないで。

「どの子だ。」

カラオケ店の別室でわざわざ取り付けさせて、カラーの防犯カメラの画像を見ながら傍らの側近に問いかける。

「はい、今歌っている娘の左隣りで踊っている娘が例の子供です。」

俺はその画像をズームにさせて、何の感慨も持たずに眺めた。

この世の何も知らず笑いさざめく子供たちを眺める。

画面が大きくなり、その娘が一人大きく映し出された。

肩までの染めていない黒い髪に、楽しそうに笑うその顔は綺麗系だ。

切れ長の目で、そのまなじりから今は涙を流して馬鹿笑いしている様子がわかる。

ちやうど時間もぽっかりと空いて、調べさせていた娘も三時間ほどカラオケ店ににいるという報告を聞いた時、それならちやうどいい、一度見てやろうと部下たちを連れてやってきた。

今このカラオケ店は、この子供らのグループ以外、貸切りにしている。

ちやうどその娘がグラスを持って席を立った。

ドリンクバーにいくようだ。

俺もすぐさまドリンクバーに向かった。

第4話 嫌いな目線

私はカラカラに乾いた笑いすぎの喉を潤すため、この4階建てのカラオケ店のドリンクバーが設置されている2階のコーナーに降りてきた。

ヨッコちゃん命名「レインボードリンク」をいそいそと作成する。

コーラにジンジャーエール、そこにオレンジジュースをたして最後にソフトクリーム。

これをぐちゃぐちゃにかきまわして、その溢れる泡をまず楽しむというしろもの。

このメンバーときて、まともな飲み物を素直に持っていけば、それはそれは良い笑顔でいじられる。

どっちを選択するかっていったら、だんぜん何とか飲める飲み物を作る！だよね。

私がこのレインボードリンク作成の微妙な量の加減を頑張っている時、どこからか強い視線を感じた。

何気にその視線の先をたどればコットンの半袖の白いセーターと綿パン姿の40すぎぐらいの全体的にでかい、という印象の男の人がカウンターにもたれて立っていた。

クスクス笑いながら目で問うてくる視線の先の私のグラスからはソフトクリームをいれた為に出た白い泡が零れる勢いだった。

「すごいね。」

そう笑う男の人に、愛想笑いを返して私は一言もしゃべらず、軽く会釈してその場を離れた。

私は皆の元に戻る為、背を向けて歩き出したが、私はまたその強い視線が私を追いかけてきているのがわかった。

自意識過剰などではなく、私は人の視線には敏感だから。

その人が意識するにしろ、しないにしろ、私は幼い頃からひどく他人の視線に敏感だった。

私はその視線が自分にとって良いか悪いかすぐにわかる。

人に言ってもどう説明すればいいのかわからないし、その説明をするには、幼いあの頃の話をしなければならぬ。

ひどく面倒で厄介な話を。

そんな私が今私に向けられるこの男の視線は悪い、と判断した。

周りから見れば、どこにも不自然さも、まして初対面の話しと言う話もしないうちからと思うかも知れないが、私の信じる「カン」が告げる。

「危険・危険、近寄るな。」と。

私は務めて自然に歩きながらエレベータ前まで来た。

エレベーターがついたので、急いで乗り込もうとしたら、気配もなくもう一人続いて入ってきた。

あのサマーセーターの男だ。

今も熱唱中の皆がこの男を見れば十中八九、うっとりとして、「できる自信にあふれた大人の男」とため息をつくだろう。

けれど私のむき出しの手や足は一瞬で鳥肌がたった。

……危険な猛獣に会ったらどうしたらいい？……

幼い頃に良く聞いた優しく響くあの声がよみがえる。

私はあの時なんて答えただろう？

過去が一瞬で蘇り、私の鼻先には、あの埃や砂煙の匂い、香水やいろいろな匂いがどっと押し寄せてきた。

めまいにも似たそれらを、すぐに現在の自分である意志が怒りでもって押えつける。

そして現実に戻った私の目の前には、全てを排したような色のない眼差しで私を見つめる男がすぐ触れられる距離にいた。

私が驚いてみじろぐと、目の前の男は私のいつのまにか傾いていた

グラスを持つ手から、そのグラスを当たり前のように自然に取り上げていた。

声も出ず男を見る私に男が何かいいかけた時、四階についた。

私は開くエレベーターから勢いよく駆け出して後ろも振り返らず皆のいる部屋に戻った。

危険、やっぱりだ。

何が何だかわからないが、あの男はダメだ。

何が目的だろう？

よくあるカラオケ店でのナンパなんかじゃない。

あの目は、そんな簡単なもんじゃない目をしていた。

私があわててドアを大きくあけて入ってきたので、皆はどうした？
って風に見てきた。

私は大きく一息をすると、

「レインボードリンク失敗したあゝ。」

と二ヘラっと笑った。

べとべとする手をおしぼりでふいて、あの男の事を口では笑いながら、頭の中では、しばし考えていた。

けれど、私はあまり一つの事に執着する事はしない悪い癖があるので、一人ではドリンクバーにいかなきやいい、と最早二度と会う事もない男だと、「自分の嫌なリスト」から綺麗にさっさと消去した。

私は「嫌なもの」は作らない主義で、どうしても嫌なもの、それが人であるならば、悪いが自分の記憶や感情から消去してしまうという得意技がある。

もちろん、それでも消去できない「つわもの」も数人いるけど、おむねその消去はうまくいっている。

私はまたまたノリノリでカラオケを楽しんだのは言うまでもない。

俺が監視の部屋に戻ると、側近の一人が俺の手を汚すグラスに視線を向ける。

俺はニヤッと笑い、なかなかいけるぞ、とグラスに口をつける。

監視カメラの映像には、初めはその目の奥にその年頃の子供が持つにはきつく冷たい温度を感じさせるものが、ある一瞬で綺麗に消え去ったのが見て取れた。

確かにこの子供だろうと、俺はそれを見て確信する。

長い間追い続けた子供達。

今までその子供の一人一人を探すために、どれほどの金を使ったか？億ではきかないだろう。

そして徐々に俺の執念に比例するように、ある程度の事実が一つ、また一つとわかってきた。

そしてその中で、「光」と呼ばれた子供の存在を知った。

俺はその「光」を探し続けた。

慟哭と共に。

ニューハンプシャー、プラハ、ベルリンなど子供を一人一人追跡した。

けれど、子供の中で最年少ながら「光」と呼ばれるあの子供らの中心だった子は未だ謎のままだった。

その情報がやっと入ったのが三か月前。

そして何人かの候補の子ら。

だが俺は今日会って確信した。

この子が「光」と呼ばれた子供だと。

俺の監視カメラに向ける表情がどんなものだったかは知らないが、この部屋にいる人間は息もするのとはばかられるようにひたすら慄いている。

「待ってろ、なあ。嬢ちゃん、楽しいか？俺も会えて楽しいぜえ。」

第5話 しつこい男

はあ、私はため息をついた。

何故に花の乙女が辛気臭いため息をつかねばならないのか、そのわけは夏休みに入ってすぐにおこった。

順調に？期末テストは赤点の幾つかをいつも通りにとり追試やレポ
ートに夏休み前の1週間は取られたが、無事にそれも終了し、バイ
ト三昧の日々を過ごしていた。

その3日目に、バイト先のファミレスに黒いスーツもぼつちりな1
0名ほどの集団が毎日現れるようになった。

私は別段気にしちやいなかったが、ヨッコちゃんが、その団体で一
番偉そうにしてる奴が、私をあからさまに見ている気がする、いい
や、あれは見ている。

と、言いだし他の子もそう言えば、と言いだしはじめた。

そう言われれば気になるもので、私は自分の担当のテーブルに座つ
た時は、それとなく見るようにしていた。

・・・が、わからん、さっぱりこんだ。

何故に？

その疑問は昨夜見事解決した。

例の集団のその男が、初めて私に店で声をかけてきたから。

「ここには、あの飲み物はないのか？」と。

私が不思議そうに見ていたのが気に入らないのか、男がうつそりと笑う。

うん、どっかで？・・・私が怪訝に思っていると男がメニューを出してそのまま私に聞いてくる。

おすすめのデザートは何だ、と。

私は営業スマイルを浮かべメニューの幾つかを指で教えた。

すると、男の指がこれか、などと言いながら私の指を意図的に撫でていった。

その瞬間わきおこる鳥肌めいたものに既視感を覚え、私の嫌なもののリストとして消去したはずの、あのカラオケ店での記憶の男がよみがえる。

あちゃー、この人か、いやいや、何であられるかな！

何でまたと思いながら、私は即効でもう一度この男を私の記憶から消去すべく、「ご用がおりでしたら、お呼び下さい。」と言いな
がらも、心の中では、まじもうこないよ、バカと思いつつテーブルを去ろうとした。

そこに小さな声で「光」lightと聞こえた。

私は何も聞こえないふりをして、そのままテーブルから立ち去った。

厨房に映る鏡には普段の私ではない誰かが映っていた。

あの男は、やはり危険。

第6話 めんどうな奴ら

はあ、マジうざいんですけど……。

なんでこう立て続けにくるかなあ。

あの変な男は2、3日に一度は、あれからもやってきて、何故か私の担当のテーブルに毎度座るし。

ヨッコちゃんや他の子と担当かえてもらっても、必ず私のところすわる、ウザッと思う私は悪くないよね。

これって、バイト仲間が私を売ってるか……、皆の顔を思い浮かべ、ないな、とわかる。

信頼してるかっていうと、そうじゃなくて、皆そんなまめな人間じゃないからね、アホでもない。

すると、答えは簡単。

あの男がくる前に先にいる人間が教えている、ってこと。

なぐんて暇人！私はそちらの方をあきれるね。

あの日あの男の言った言葉、light——ここで聞くにはありえない言葉。

この男が何故その言葉を、私の過去の呼び名を知っているかは考えない。

今さら考えても仕方ないから。

大切な古い友人に、私はあの掲示板をみるとメールがきた日の返信に「うさぎの絵」をつけた。

それは、とりあえず身を隠せ、という私達だけの合言葉。

あの日うさぎの絵を送った時点で、古い友人から、また別の古い友人へ伝言ゲームのように、私の指示はネットを通して広がったはず。遠い所にいる友人に、lightと呼ぶ男が出現した段階で、更に白黒だったうさぎの絵の、書かれている目だけは色をつけて赤く塗ったものをセカンドアドレス宛に送っている。

「もっともっと身をひそませろ。」という意味。

この赤い目のうさぎは、初めて送った、まさか送る日がくるとは考えてもいなかった。

必死に考え身をひそませているだろう友人を、友人たちを思い、私ができる事は、堂々とここにしていること。

今さら私にこわいものなどありはしないのだから。

lightという呼称を知っているのは当事者たちである私達と、あの男、ああ、それと、あの掲示板で行方がわからないとされていた関係者。

それなのに、この日本で私の前に現れた私の別名を知っている厄介

そんな男。

ああ、本当にめんどうつたらない。

まどろっこしいのも嫌いだしね。

けどね、けれど・・・。

あの掲示板が、あの都市伝説がもし本当なら。

この国で平和ボケしている私へのちょうどいいジャブになった。

私は本当の意味で弱肉強食ってやつを知っている。

この平和な国に住む女子高生としては、どうなんだろう、とは思っ
けど。

ああ、自分の体温が、どんどん冷えてきているのがわかる。

今の私の顔はみせられたもんじゃなくひどく冷たい顔をしているん
だろう。

これじゃダメ。

さあ、にっこり笑ってあの男の元に注文を取ってこよう。

いざ、私が振り返ると、女子大生どのがバイトの時間でちょうど入ってきた。

相変わらず、ヨッコちゃんのせいで、絶対そうだ！つんけんする彼女に、

「今日もよろしくお願いします。」

と頭を下げてホールに出る。

挨拶を返さぬ彼女に、私は生暖かい目で、君はそれでいいよ、うん、てな優しい気持ちになった。

例のテーブルに向かう私はいつもの私だった。

第7話 雉も鳴かずば

ばたつとあの男がやってこなくなった。

ラッキー私。

8月に入り、パートのおばさま方のお休みが多くなり、もうバイト
三昧にあけくれている。

中旬すぎれば、私もバイトを休んで、課題をうつさせてもらったり、
友人たちとの旅行も待っている。

がんばれ！今稼がないでいつ稼ぐ！

例の女子大生と店長は何やらもめたらしく、オイタのつけは、女子
大生が運営本部に直訴であっけなく決着をみた。

そりゃあ、イメージあるものね、ファミレス店として。

めでたく店長は左遷され、研修という名目だけど、実質左遷。

そして女子大生も解雇された。

バカだよね、くだんの女子大生、こういう系列に就職はもはや絶望
だよ。

結構ネットワーク凄いからさ。

おまけに奥さんにも慰謝料2人して請求されたらしい。

ヨッコちゃん、どこでそれを聞いた？ 私にはそれを知ってるあんたが不思議でならない。

バカ騒ぎして、自分を裏切った店長が許せないって、自分の立ち位置わかってないから、こうなるんだよ。

新しい店長候補は若いけど、やる気満々な女性。

・・・パートのおば様が、キリリと復帰なさった暁には、いじめられるな。

そんな感じでちょっとしたアクシデントがあったけど、私のまわりはいつもの日常を取り戻してきた。

バイトを夜の10時に終えて、コンビニによって帰ろうとした時、珍しい人間に会った。

私は、今度は何だ、とため息をつきたいのを我慢して、コンビニでさりげなく手渡されたメモに書かれた携帯に家に自転車で帰りつつ電話をかけた。

「何の用？ 1分でどうぞ。」

電話越しに、相変わらずだ、可愛げのない、との声がする。

「私は必要な人にしか、この私の貴重な可愛さをあげない事にしてるの。切っていい？」

そう言って切ろうとした。

男は、一言、「最近まつわりついていた害虫な、やられたぞ。」

そう言って、私の反応をうかがっているのが、電話越しとはいえ注意深く伺っているのがわかる。

私はそれが何？って感じで電話を切った。

普段通りに、いつものようにを心掛けて家に帰る。

あの男の事だ。

私の様子がわかる所にいるに違いない。

相変わらずというのなら、あんたこそ！といってやりたい。

陰険で、腹黒で、何であんなのが警視庁の星なのか、本当に納得できない。

大嫌いだ、怖いから、いろいろな意味で声には出さないけど。

私は家に帰ってすぐにお風呂に入った。

いつもは、シャワーですませるけど、今夜は特別。

お風呂のお湯がたまったら、急いで浴槽に飛び込んだ。

そして浴槽にくるっと体を丸めて潜った。

ゆっくりと目をあける。

浴槽のぬるいお湯のなかから天井をみあげる。

ついで浴槽の中のぬるい湯の中をみつめる。

叫びだしたい気持ちを我慢せず「わー！」と声を出す。

もちろんお湯の中だから、声などでない。

息継ぎをするため浴槽から顔をだし、それを何度か繰り返し、やがてわめくのをやめると、浴槽の中で心行くまで泣いた。

あのまわりについていた男が襲われたらしい。

あれだけの人数を従えていたのに、死んだのか？

考えるな、考えるな！

私のせいのはずがない。

ここは日本だ。

世界でも安全な国だもの。

かの人は遠い異国で自殺した。

それが真実。

都市伝説など、他愛もないからこそ都市伝説なんだ。

ありえない。

あのまわりついてきた男は、いかにもな男だった。

まともな稼業には見えなかった。

トラブルをいつも抱え込んで、そして生きてきたに違いない男。

私には関係ない。

ああ、だけど……。

それなら、あの嫌味インテリが何故今夜わざわざ私の前にあらわれた。

随分前に会って最後のあの男が。

しっかりしろ！私はいつのまにこんなに弱くなった？

何でもない、あるはずがない。

浴槽のお湯の中から眺める外界は、ひどく揺らいで、私を不安にさせた。

第8話 剥離

お風呂を出て、遅い夕食を簡単にとった。

私はパソコンをあけて、古い友人にメールを送った。

慎重に慎重を重ねるにこしたことはない。

うさぎの動画を送った。

まさか、とは思うが、私は彼らを守りたい、それは今も昔も変わらない真実だから。

これで当分、お互い接触はなしだ。

少なくとも半年は。

エアコンをつけぬままのこの部屋は、はるか昔のあの時の感覚を呼び起こす。

特に今日みたいな日知人に思いがけず会った日は。

私は急いでエアコンをつけた。

階下で眠る祖母を思う。

それだけでなくとも過去幾度心配をかけたか。

絶対に心配させずに、パスポートの申請をする方法はないだろうか？

父母の元にいくため？・・・ない、ない。

彼らの元にいくなどありえないのは、さすがの人の良い祖母でも無理だ、知ってる。

学校行事、うん、これでいこう。

パスポートの申請は、この時期は時間がかかる。

こんなことなら、パスポート切れる前に延長しとくんだった。

まさか日本から出ようなど思ってたからなあ。

私は不安で眠れなくなっているだろう古い友人の一人を思う。

自分の為にも一度確かめるべくアメリカに行かなければ。

早ければ早いほどいい。

私は布団に入ってもなかなか眠れなかった。

何て事してくれるんだ、陰険メガネ。

あんたが顔を見せるから、自分でも思ったより神経質になってしまっているじゃないか。

私は眠るのをあきらめて、明日のバイトはきついかも、とそう思っ
て眠るのをあきらめた。

こんな日は嫌な事を思いだす。

そんな眠るのをあきらめた私が目にしたのは、携帯のメール着信を知らせるランプの点滅だった。

ああ、お風呂長かったもんなあ、そう呑気に携帯を手にとってメールを開けた私は、アメリカになど行く必要がないのを知った。

見覚えのないアドレスから大量に送られてきていたメールには、同じ言葉が書かれていた。

最新の3つほど開けて、それ以上みるのをやめた。

自分で自分が思ったより冷静なのに驚いた。

この日本でのんびり過ごしていた私から過去の私が剥離して浮かび上がってくるのがわかる。

メールに添付されている画像は、あのサイトで最近各地で行方不明だと言われた人たち。

その映っている顔に見覚えがある。

メール一つに映っている顔が違うのも、何というか、相変わらずと、これこそ言うべきか。

ああ、この人は警察関係者、しゃべらない私達に優しくはない対応をしてくれた大人げない奴。

この人は児童福祉施設の職員、裏表が激しい女だった。

ちなみに古い方を試しに一つ開けてみた。

それは、はるかに思える過去に、であった今はいない子供の一人、名前は思い出せないけれど、その特徴的な赤毛とそばかすの女の子の事は覚えていた。

私が幼いながら、自覚を持った原因の子だったから。

メールの本文には、全て

「マイ・リトル、だあい好きだよ。」ただそれだけが書かれていた。それも日本語で。

その最早生きているには難しい血の色にあふれた画面をみながら、私が思ったのは、私が守る人間の顔の数々だった。

私は、あの嫌味メガネの携帯に電話をかけた。

いらぬ腹を探られては面倒だ。

守るべきものを守れなくなるから。

すぐ覆面で迎えにくるという。

あんた知ってたでしょう？聞きたい言葉をかろうじて呑みこむ。

この日本でかの人に対峙できる人間はいるのだろうか？

今からくるという陰険メガネですら、ホンモノは知らないのに。

ますます自分の中から過去の私が剥離してくる。

あの時のように誰も、誰も頼れない。

時は流れた、今となっては痛いほどに。

私は優しい世界をこの日本で知ってしまった。

あの時とは違う。

年齢もまた。

全てが不安定要素ばかり。

けれど……私は少なくとも誰よりもかの人を知っている、それは彼を調べる研究者はじめ自他とも認める所。

ピンとアンテナをはって、うさぎのように危険からいち早く逃げさせる、それに尽きる。

携帯が鳴った。

陰険メガネがついたのだろう。

私は何気なく出ながら階段を下りる。

第九話 探り合い」

私は今、協力という名目の事情聴取を受けている。

このかよわいはずのコムスメに対して、この人数は何よ。

心理学の専門家から科学捜査のチームがいて、勿論陰険メガネも責任者としている。

どうやらその陰険メガネの隣にいる面々はかの有名な公安当局の方々らしい。

何とものものしい。

そりゃあ仕方がないか。

私の協力という名の元に提示した携帯は没収されたまんま。

返ってくるなんて期待はしていないから、買い直さなきゃ。

経費はもちろん陰険メガネで、ね。

「だから、何度も言ってるけど、突然メールが送られてきたの。彼がこの日本にきたのかどうかなんて、私にわかるわけないでしょ。」

「て、いうか、私の方がびっくりよ。何で生きてるの？私の方が知

りたいわ。」

もう、繰り返し同じ事を言い続けてうんざり。

日本ではいつもこうね、成長がない取り調べてやつ。

私がうんざりしたように言うと、さもエリート然とした若い男がきつく私に言い放つ。

「篠宮さん、事態は緊急を要しているんです。もう一度お尋ねします。あなたは彼だと思われるんですね。確かですか？」

私はまだ若い公安と思われるその男をじっと見つめた。

「あなた、写メみた？それが答えよ。」

「違うと思うのいいわ。実際彼は死んだはずだし。ただ、私は知らない所から今夜届いたメールに彼の匂いを感じた。だから昔の知り合いの高橋さんにすぐ連絡した。それだけよ。」

「私にはあと答えようがないわ。」

そうにつこり笑って答えた。

「ねえ、今何時かしら？私の携帯はかえしてもらえるのかしら？私ってバリバリの未成年だし、明日もバイトなの。もう日付変わっているわよ。」

そう言う私をにらみつける彼。

そこに陰険メガネこと高橋が柔和に話しかける。

「うん、それはわかってるんだけど、事が事だからね。ごめんね、悪いけどもうちょっといいかな？アメリカやヨーロッパの幾つかの国からも問い合わせが来ていてね、もちろん非公式にね。どこから情報が漏れるのか、本当にこの国が心配になるよ。」

そう言って眉を下げる。

はたからみれば、好印象の人物にみえるだろう。

案の定、ここにいるのは、こいつのシンパばかりらしい。

目に見えて空気が変わる。

エリートの中のエリートの癖に、それを鼻にかけないキャリアとして若い時分から名をはせているらしいが、これほど食えない嫌な奴はいないと私は思っている。

あの当時から、この男の前では気がぬけないしぬくつもりもないが。

「それでね、やっぱり君が言うことには、皆注目しているんだ。これは最新の情報なんだけどね、非公式にあの元共産圏の国が、かの殺人鬼の母国だけど、君も知ってるだろうけど、最終的に彼を収監した国がね、認めたみたいだよ。」

「すごく苦しい声明だけどね、確かに自殺した彼は偽物の可能性もあったかもしれないって。どうせ何かで彼を利用しようとして失敗したって所だろうね。」

「高橋さん！」

何人かが大きな声を上げる。

部外者である私に聞かせて！って非難ね。

「いや、こうなったら危険なのは彼女だよ、あつ、違うか、彼女の周囲か？うん、研究者によっていろいろと発表が違うから僕にはわからないけど、これはもう黙っていていいことじゃないんだよ。」

「僕たちはこの国の国民を守る責任があるんだからね。なあに、始末書なんて何枚でも書けばいい事だよ、僕にはね。それより大事な事を考えなきゃ。」

そう言って周囲の人間に爽やかに答える陰険メガネ。

ほら、そうやって周囲の体育会系はコロッと騙される。

こいつは国民なんて知ったことないのにね、ただ自分の好奇心を満足させるために動く。

小さな子供より性質が悪い、権力と知恵はたんまりあるから。

私はあの過去の日、こいつが遊び感覚で生きている事を何故かわかっていた。

気付いた私には、それ以来猫をかぶらない。

しかし考えてもみる、当時の私は子供だぞ、その私に、

「ばれちゃった？俺にはどうでもいいことだよ、何人、人が死のうがね。ただそれが楽しませてくれるかどうか。わざわざこの仕事選んだのに、めったに面白そうな事件ないんだよね。」

この男は面白くするために、犯人さえ作っているんじゃないかといった私に、意味深に笑った。

犯罪者は面倒そうだから、取り締まる方になったんだと、簡単な事でしょ、と子供の私に言った男に改めて目を向ける。

陰険メガネこと高橋は、君が言うのは信ぴょう性あるなあ、と深刻にあごに手をかけ私を見ている。

「当分、アルバイトは休んでももらえないかな？もちろんその分の補償は僕個人でさせてもらおうよ。」

「それと携帯は、うちで調べさせているから、これも買わなきゃね、悪いね、本当に。」

「でも、どこの捜査機関も喉から手が出るほど欲しがっている唯一の証拠なんだ。わかってくれるよね。」

じゃあ、また何かあったらすぐ連絡くれるかな、身辺警護が隠密でつくからね、安心して、そう言って私を車で送ると言いだした。

何か言いだしそうな周囲の人間に、あくまで善意で彼女はきてくれたんだし、連絡もくれたんだ、時間も遅いし、これ以上はダメだよ、と諭すように言う。

私は帰りの車で隣に座る高橋に、

「嬉しそうですね。」と言ってやった。

「ああ、本当に。日本で暴れてくれるかなあ、楽しみだよ。」

と答えてきた。

最後に家の前で降りる時、高橋が言った。

「ねえ、迎えの車が行く前に着信あったろう？ あれ高校の友人の名前だったけど、彼だろ。」

私は知らんふりして降りた。

「生き延びたら教えてあげる。」

そう答えた私に、それはそれは大爆笑で答えてくれた。

第10話 長い1日の終わり

私は家に深夜そつと帰った。

携帯は高橋が用意するというのを、はつきりくつきり断った。

あいまいな日本人じゃないので、現金で頂いた。

あの男に携帯を渡された日には、全てその携帯から情報はもとより、悪くしたら家の中までダダもれだ。

もちろん、この家には最早、人権など存在しているわけもなく、盗聴やら何やら、この協力という取り調べの間に、寝てる祖母など赤子のようなもの、きっちりやられていると思っいて間違いがない。

ましてアメリカやヨーロッパ各国など、かの人の関係がある国に、あつという間に情報が洩れているという。

もはや、我が家は日本のみならず、アメリカなどの諜報活動バリバリだろう。

ありえん、映画の世界か！そう怒鳴りたいのをこらえて、それも仕方ないか、と納得もする。

それだけの人間だ、あの人は。

何故アメリカがかの人をいかに、かの人之母国とはいえ手放したのか？

どうせわけのわからないパワーゲームの果て、うまい利益でもあったのだろう。

確かにアメリカでの最後の頃は、あの人は何にも反応せず、痛みにさえ反応せず廃人宣告を高名な精神科医達から宣告されていた。

時々、ふっと現れるあの人の特集で、そう聞いた覚えがある。

もちろん、廃人？そんなの私は信じなかった。

廃人というのは人であつたものの行く末だ。

あの人は、初めから人ではありえなかった。

だから私は何を考えてそんな行動をとるのか、と思いはしても、私と私の大事な友人にさえ関わらなければよい、そう思っていた。

私は天井を見上げる。

さて、この天井にもカメラや盗聴器が仕掛けられているのか、大層な事を、と思い、私はバカじゃないかとも思いながら、その天井を静かに見つめて眠りにつこうと思った。

こんなの、あの幼い日に慣れている。

まだ隠そうとするだけカワイイもんだ。

あの高橋からの迎えの電話だと思って、階段を下りながら携帯をみた私がその発信先をみると、我らがヨッコちゃんからだった。

「はい、はあい。ごめん、ちょい出かけるの。」

そう言った私に、その携帯は無言で答えた。

確かにヨッコちゃんの携帯。

けれど私の中のもう一人が、彼だ、と囁く。

ヨッコちゃんは？・・・・大丈夫、写メの最新には彼女はいなかった。

私はしばし携帯をみつめると、そのまま携帯を切って、玄関で靴をはいた。

これはどういう事だろう？

ただ一つわかったのは、パスポートをとるまでもなく、彼は生きているのがわかり、その上、この日本にいる、という事実だった。

私は迎えの車に乗り込みながら、話しても良い事、悪い事を考えて、この件は黙っている事にした。

日本にいるなんて言ったら、私の自由はなくなるに違いないから。

私はベッドに深くおさまり、いい体勢になると、ゆっくりと目を閉じた。

これからの事を考えながら。

第11話 悔い（前書き）

例の嫌な男視点

第11話 悔い

俺の家はいわゆる極道で、それを暴対法と同時に廃業し、事業家として転身した。

親父はもともとこっちの方が向いていたらしく、バブルに乗り、バブルがはじけた後も、つぶれた泡のうまみを吸い上げ、更に大きくなった。

長男である俺の母親は、やはり極道の娘で、俺はばっちり、そちらの水があっていた。

それと同時に、数字を扱うのにも向いていた俺は、2人のいいところだった。

事業にのめりこむ親父が一度だけ、一人の女に本気で恋をした。

フィリピンの女で、やがて親父の子供を身ごもり、娘を産んだ。

俺の母親は、親父になど、もともと愛情もなく、ホストなどの若いつばめを囲って同じように遊んでいたのも、おやじが子供を引き取りたい、と言った時にも無関心に、好きにすれば、と言っただけだった。

俺が中学に入る頃、その赤ん坊がきた。

俺の家で誰にも関心が向けられぬ、唯一親父だけは別だったが、その頼りの親父も仕事に忙しく、俺もまた、悪い遊びを覚えはじめたばかりだったので、勿論顔さえみなかった。

あれはいつのことだろう。

俺が悪さをして深夜久しぶりに、ほとぼりが冷めるまで家で大人しくしよう、そう思って帰ってきた時、赤ん坊の泣き声がひどく耳に入ってきた。

俺が自分の部屋に入ろうとしたら原因がわかった。

雇われている乳母が、ドアを閉め忘れていたせいだった。

俺は何気にうるさいんで、そのドアを閉めようとした時、何故なのか、片親違いの妹とやらをみてやろう、そう思った。

大声でベビーベッドで泣く妹は、俺は名前さえ知らなかったんで、

「お前うるせーぞ。」

と言って近寄った。

そこで泣く生き物は、小さくて真っ赤に泣いていて、俺は戸惑った。

チツと舌打ちして、乳母のヤローは何してんだ！そう思い更に近くによった。

酒の勢いもあり、ドジを踏んでしばらく家にいなきやならねえ苛立ちもあり、たたきつけて殺してやろうか、そう物騒にさえ思った俺に、その赤ん坊は泣いて手を伸ばしてきた。

今思えば、泣いて手足をつっぱなしたって事だろうとわかるが、あ

の瞬間の俺はほうけてしまった。

何の打算もまして力のない赤ん坊が、俺に手を伸ばしたんだ。

俺は酒で回ってない頭のまま、おっかなびつくり、その赤ん坊の手を触った。

小さくて小さくて小さい手だった。

そのままどうしていいかわからなくなった俺に、声がかかった。

「まあ、坊ちゃん、すいません。おこしてしまいましたか？」

そう言った女は年配の乳母だった。

乳母の手に哺乳瓶があり、お湯を切らせてしまった、とか言ってきた。

そんなことより俺はこの手を離したくなかった。

俺は初めて困惑する、という感情を覚え、乳母を見た。

乳母はそんな俺を見て、クスクス笑い、坊ちゃん、ミルクあげてくれませんか？と言ってきた。

それからあれよあれよという間に、俺はひどく頼りない生き物を腕に抱え、乳母の指導の元、ミルクを飲ませていた。

「坊ちゃん、お上手ですよ、あらまあ、お酒の匂い。いけませんよ、まだ坊ちゃんは中学生になられたばかりですよ。体に悪いですよ。」

そういわれた俺は、俺を坊ちゃんと呼ぶ事も、その小言も自然と受け入れているのを知った。

ふだんであれば許すはずのない俺が。

それから、俺と乳母の澄江で妹の愛を可愛がって育てた。

俺は用事がない限り妹の部屋で過ごし、おむつもミルクも澄江にかかわれるほどにうまくなった。

妹の愛はその名前通り、俺に人を慈しむことを教えてくれた。

俺は妹を守るべく、力をつけようと、はじめて明確に思った瞬間でもある。

座ったとき、歩いた時、俺を「にい」と呼んだ時。

俺の全ての優しい感情は妹によってもたらされた。

妹を膝に抱き、澄江の故郷の話を聞きながら、幸せというものを知り、俺は守るべきものの為に、その牙を爪を頭を磨き始めた。

妹が5才になった時、大けがをして入院した。

俺はそれを家に帰ってから聞いた。

何故だ、何故すぐに俺に連絡を入れない。

俺は大学から帰ってすぐ妹の病院にすっとなでいった。

そこで何故俺に知らされなかったのかわかった。

妹は親父の子供じゃなかったのが、手術の為に調べて判明した。

そこからは、あれよあれよという間に、妹は俺の手から引き離されて、養女というていいのいい厄介払いでアメリカにいかされた。

俺は最後に、最愛の妹に約束した。

幼いなりに傷ついた妹に。

「待ってろ、お前は俺にはたった一人の妹だ。血のつながりなんて関係ない。必ず迎えに行く。兄ちゃんを待ってろ！」と。

澄江だけは、何とか養女先にねじこんだ。

給金は俺が出すからと。

俺はそのころの株の全てのもうけを、澄江の給金として、その養女先の両親に送った。

日系人の両親もそれなりのよさそうな人間で、澄江からの報告を楽しみに、いつか、いつかと俺は必死に力をつけた。

あの掌を返した親父から、その力を奪う為に。

血のつながりなどクソくらえ！だ。

俺が信じるのは、あの小さな小さな柔らかな手。

俺を信じるあの瞳。

俺が守るべき最愛の妹。

それが一転したのは、澄江からの一本の電話だった。

第12話 許されざるもの

澄江が泣いていた。

愛の行方がわからないと。

もうじき7つになる愛が勝手にいなくなる事はない。

やっと日常会話がわかってきたと言っていた。

隠れて泣いていたと聞き俺も泣きたかった、友達ができたと聞き俺も嬉しかった。

どこにいくにも澄江に言わないわけがなく、その澄江の存在が新しい養父母と、なじむまでいかないう要因とはいえ、俺は強硬に澄江をとどめた。

本当は直接電話で話したかった。

けれど、それをしたら愛に余計な感情を与えてしまう。

そうして我慢して我慢して・・・。

それから愛の遺体がみつかったと聞いたのは1年がすぎたころだった。

アメリカの片田舎の大きな農場の片隅で、多くの子供達の遺体と共に、愛がみつかったのは。

生きる屍のごとく、家にこもり情報を見つけてはアメリカ各地に愛を探し続けた俺は、その報告を愛の養い親から日本にいる時に聞いた。

大量にある骨のかけらのどれが愛のものかわからないが、愛の特徴的な髪飾りが出てきたと聞いた。

その髪飾りは祖母が大事にさしていた昔風のもので、アメリカでは珍しかった。

それを愛はいつも大事にさしていた。

俺はほうけていた。

それ以来ずっと。

その形見の髪飾りを澄江が持って帰るまでは。

澄江は俺を見るなり泣き崩れた。

子供の様に号泣する澄江を抱きしめて俺も泣いた。

葬儀にはでなかった俺は、あんな合同葬に出る気もなかった。

澄江が持って帰った髪飾りで、俺と澄江は愛を心から弔った。

愛はスクールバスで降りて直後さらわれた。

そして今、世界を恐怖で震え上がらせている連続子供誘拐殺人犯の手にかった。

奴は今檻の中だ。

自分から通報して。

そして俺はやっとなすべき事をみつけた。

何故、どうして、いやどういった状況で愛は殺されたのか、全てを知ろう、そう誓った。

そして、奴は俺が……。

それまでが嘘のように以前のように、いや、それ以上に俺は力を求め、大学を卒業と同時に取締役についた。

周囲のとりあえずは新人社員として、なんて言葉は実力で黙らせて。

そうして調べて、調べぬいた。

奴の檻の中での様子もまた、くわしく手に入れた。

そんな中、奴が唯一反応するのは、一人の子供の話しただだと耳にした。

奴が自首した時に、その農場で生き残っていた子供の一人。

けれどその後、奴は更に嚴重な刑務所に移動になり、そこは買収もきかず、情報は入ってこなくなった。

生き残った子供に俺は初めて焦点をあてた。

けれどその子供達の情報は隠され、ようよう探し当てた時には、それから何か月もたっていた。

なぜその子供らが親元に帰されないのかは、報告書を見てわかった。

一切口を聞かず、離されるのを極端に嫌がる。

いくら親兄弟が訪れてもそれは変わらない。

収容された施設の一部屋で、ゴムまりのように、くっついてい子供……か。

やがて、施設の職員は一つの事に気が付いた。

その保護された子供の中で、一番年少の子に子供達はいつも、その体の一部を触れさせていることを。

そして驚いた事に、子供達はしゃべらないのではなく、しゃべる必要がないのだということも。

それは、全てアイコンタクトで行われていたから。

それからの施設の対応は、専門のカウンセラーを全て取り換え、新

しくその子を中心に、コンタクトをはかった。

それからであつという間に、事は良い方向に向かい、それから1年もするころには、子供達はおのおのの両親のもとに帰っていった。

全ては秘されたまま。

俺はまずその生き残った子供6人の足取りをつかまえる為、動いた。

最初の3年は何も、何もつかめなかった。

奴がつかまってから、その時点で5年近くがたっていた。

だが端緒は意外な所におちていた。

奴を崇めるいかれた連中の一人のサイトに、俺の大学にいる奴はゴールドデンチャイルドの一人に違いない、そういう数多ある文章の一つだった。

ゴールドデンチャイルド、あのいかれた殺人鬼と最後は奇妙な共同生活をし、生きていた子供達を奴ら信者はゴールドデンチャイルドと呼ぶ。

自称他称するゴールドデンチャイルドの情報も、俺は多額の金をばらまいて集めていた。

俺は今まで何千とあらわれるそれらを、必ずシロとわかるまで調べさせた。

金など幾らでも出す俺は、ここで初めて本物をみつけさせた。

その名門大学に通う学生は、自分では誘拐犯にかかわったとは一言も漏らしていないが、その周辺を調べて、空白の時間があるのを見つけた。

専門に雇っているアメリカのチームが、すでに削除されたデータを復活させ、両親からの搜索願いが出ていたのをみつけた。

そこからは早かった。

子供達の収容された施設も割り出され、唯一残っていたファイルを持ち出した。

子供たちの名前はないが、それは最終的に統括された未完成のレポートだった。

そこで俺はlightと呼ばれる子供の存在を知った。

奴が唯一反応する名前。

あの異常な世界で特異であった子供の名前。

そして、一人、一人と割り出していった、ゴールドンチャイルドと呼ばれる子供らを。

やがて、灯台元暗し、最後の最後までわからなかった子が、日本人、ましてこの日本にいと知った。

俺はその事実狂った、確かにあの時の俺は錯乱していた。

何故、何故俺の愛、同じ日本人の愛が死に、その子供が生きている。
奴が刑務所で廃人になり自殺したと聞いたより、より激しい感情が
わいてきた。

全ての俺に残っていた感情はそれから、その子供の元に向かった。

初めて実物を見た時、拍子抜けした。

楽しそうにカラオケで歌っているのはただの少女だった。

けれど光、と呼んだ時、その目に浮かぶ一瞬の闇に、これか、と納得した自分がある。

この手で殺してやろうか、あのイカレタ男が唯一執着したお前。

お前を殺せば、奴は、奴が生きてれば泣くだろう。

俺はファミレスで姿を見る度、いろいろな殺し方を想像した。

あの時、普段通りに家の門に車からおりた俺は、一瞬何がおきたのかわからなかった。

背後の護衛の怒声、倒れる音、そして振り向いた俺がみたのは、俺の護衛の10人ほどいたそれを、目深にフードつきのコートをかぶった大柄な男が、軽々と喉笛を切り裂いていく姿だった。

俺もすぐさまその戦いに身を置いたが、この日本で銃など持ち歩いているわけではなく、俺は護衛の警棒でそいつと対峙した。

男はまるで踊るかのように、体重を感じさせない動きで、場には慣れている俺でさえ圧倒されていた。

まるで闇そのものの黒をまとった男。

その時俺は気付いた。

奴だ！と。

真っ赤に燃えた頭で、奴を殺そうとふりかぶった警棒ごしにみた俺は、その瞬間何か所も刺されていた。

ありえない速度で。

倒れる瞬間、耳元で流暢な日本語が聞こえた。

「あの子に囚われているオトモダチ。仲良くしようか？」と。

第13話 まぬけな私（前書き）

ただ今オンラインゲームにはまっているもので、更新はゆっくりと、
なっています。

第13話 まぬけな私

朝、いつものように起きた私は、布団に横たわったまま、自分のまぬけさに気が付いた。

あの男がこの日本で襲われたんだもの、例のあの人が日本にいるなんてバレバレじゃん、と。

どうやら自分では、自覚はなくとも、かなりグルグルしているみたいだ。

そんな子供でさえわかる事を、気が付かずにしたなんて。

突然、本当に突然、大声を出して泣きたくなった。

あの幼い日以降、周囲にわかるような無様に自分が声を出して泣くことなど思いもしなかったのに。

目をつぶり、掌をぎゅっと握り、過去に思いをはせる。

ほら、涙なんか一瞬で引っ込んだ、凄い魔法だ。

私は自分に問うてみた。

彼の人が生きていて、恐ろしいのか、嬉しいのか。

あの日々が異常だったのは今思っても確かな事だ。

けれど、ものすごくシンプルに、当たり前のように、そこに生と死

があった。

戦場もまたそれをわかる一つだと思うけど、そこにいたのは鍛え抜かれた軍人ではなく、意志などないまま連れてこられた子供と、たった一人の狂った大人だった。

あの日の事は覚えている。

私は5才になったばかりだった。

母に連れられショッピングセンターに誕生日のお祝いを買いにいったんだっけ。

大きなウサギが子供たちに風船を配っていて、私はそれがどうしても欲しくなりわがままを言って、列に並んだ。

綺麗な赤色、黄色、青色の風船。

しかし私の順番でもらえたのは白い風船だった。

ひどくがっかりして母の元に戻り、その白い風船をそれでも手にして、買ってくれるというぬいぐるみを売り場を見ていた。

かわいい茶色の犬のぬいぐるみを買ってもらい、その首にリボン、確か赤色のリボンをかけてもらい、ご機嫌で駐車場に向かっていた。

母が車に大量の荷物を積みいれていた時、私の手から白い風船がはずれて飛んでいってしまった。

今でもあの青い空に飛んで行った白い風船は、脳裏に焼き付いている。

私があきらめきれずに風船を目で追っていた時、視界の隅に、あの風船をくれたウサギが目にとまった。

おいでおいでと私に手をふるウサギに、私は喜んでかけていった。

けれど近くによると、また少し離れてしまう、その繰り返し。

何度目かの時、そのウサギを追いかけるのを私は一瞬ちゅうちよし、いったん母の方を見て、まだまだ荷物を積んでいる姿を確認して、もうちょっと大丈夫そうと、そのヒラヒラと手を振るウサギの後をついていった。

そして、やっと風船をくれるだろうウサギに追いついた私が、手にしたもの、綺麗な色の風船ではなく、意識のなくなる暗黒だった。

第14話 過去

私が目をさましたのは、暗い昏い小さな部屋だった。

一瞬ここがどこかわからずに、そしてやはり見知らぬその場所に私は大声を上げて母を呼びながら泣き出した。

やがて泣き疲れて眠ってしまった。

次に目をさました時、やはり真っ暗な中だった。

そして私はまた泣いた。

泣くのも疲れて、喉がひどく乾いていた。

暗い中やがて私は自分以外の気配を知った。

こわごとと目をこらすと、片隅に誰かがいるのがわかった。

私は「お母さん知らない？」と泣きそうになりながら声をかけた。

けれど答えはなかった。

私がまたどうしたらいいかグスグス泣いていると、急に部屋が明るくなった。

眩しくて一瞬何がおきたのかわからなかったが、次の瞬間私は誰かにわきの下を持たれて、ぶら下がっていた。

私は驚きのあまり泣く事もできなかった。

それは父より背が高く、父より若い男の人だった。

その人は私をぶらさげたまま、私をいろいろな方向から、じろじろ見ていた。

その後私を荷物のように投げ捨てると、片隅にいた、驚いた事に片隅ごとに何人かの子供達がうずくまっていた。

この小さい部屋のどこにこれだけの子供達がいたのか、私はきょとん、としてしまった。

男はざっと見渡して、大股に歩きだし、片隅の更に奥にいた私よりも大きい男の子を腕に抱えて出て行った。

そしてまた暗闇になった。

そうして初めてしくしくと泣く自分以外の声を聞いた。

第15話 過去？

そうして私はいやおうなく、子供の順応さで、その部屋での暮らしに徐々に慣れて行った。

1日1食の食事と水を持ってくる時と、あの時のように思い出したかのように、子供を一人連れて行くときにしか男は見なかった。

トイレだけはきちんとついていたおかげで、空腹や喉が渴いた時はトイレの水をみんなで飲んでいた。

その時の子供の数は8人だった。

男の子が3人に女の子が5人いた。

この部屋では何より暑さが辛かった。

部屋の壁にペタっと体をよせ、じっとしていることを自然覚えた。

時間の感覚もない中で、私はある日歌を歌った。

大好きなアニメの歌を。

すると誰も話さない中、一人の女の子が初めて小さい声で私に話しかけてきた。

「それ知ってる。」と。

それからぽつぽつと話すようになり、時々アニメの歌を皆でかすれた声でクスクス笑いながら歌うようになった。

日本にいる祖母が日本語の勉強のために送ってくれるアニメが、誰ともしゃべらなかつた私達を初めて結びつけてくれた瞬間だった。

それから急速に私達子供同士、孤独という言葉は知らなかつたけど、その感情を癒しあつた。

みんな今の状態がなんなのか怯えていたから、理屈ではなく本能で、家族の事も自分の事も話さず、ただひたすらアニメの話しをぽつぽつしては小さく笑いあい、歌を思い出しては歌つた。

そうしてまた、男がやってきて私より大きい女の子を腕に抱え出て行つた。

猫バスに乗りたい、そういつていた子。

私達が7人になった時、一番体の大きい男の子が言った。

「ねえ、みんなどこにいつちゃうの?」

私達は扉の方をみつめたまま、誰も答えは知らず、ただ黙るしかなかつた。

第16話 過去？

また男がやってきた、子供を連れて行くために。

一番最初に話しかけてきた赤毛の女の子を連れていこうとした。

そして私は初めて抵抗した。

私は男のひざにしがみつき、「連れていかないで！」としがみつき、他の子たちも、私の行動に驚きはしても、すぐさま弱弱しいとはいえ、同じように男の膝にすがりついた。

それを見て、赤毛の女の子も腕であばれだした。

男は一瞬私を見たけど、私達をしがみつけたまま、部屋を出た。

振りほどかれても私は、私達は夢中で男を追いかけた。

「お願い」「お願い」と言いながら。

そうして私達はそのまま、そのおぞましい場所に何もわからず夢中でおいかけた為、何の準備もなしに入ってしまった。

その部屋はピカピカの長い台が一つと、沢山の大きな刃物、のこぎりが所せましと置いてあり、壁も床も水に浮く絵の具のような形のシミでおおわれた、ひどい匂いがする場所だった。

私や他の子たちも、訳がわからないなりに、思わずその異様さに沈黙した。

腕で暴れていた子もまた。

そうして男の顔を見て、何故かわかってしまった。

とてもよくない事をこの男は、ここで私達全員にするつもりだと。

だからかまわず追いかける私達も連れてきたんだと。

へたりこむみんなとまるで人形のように大人しく台に横たえられる女の子。

男が大きな包丁を手にしてふりかぶった瞬間、私は夢中で男に抱きついていた。

「やめて、やめて！」

「こんなの楽しくないよ。」

「楽しくなきゃダメだよ！」

「私と遊ぼう、楽しく遊ぼう！」と。

ぎゅっと目をつぶり、私はまた何かをわめきながら、男に必死にしがみついていた。

自分でも何故体が動けたのかわからない。

ただ、このままは、とてもこわい、そう思った。

どのくらいだったろう、私は初めて男の声を聞いた。

「楽しくないの？俺は楽しいよ。」

その声は綺麗で低く聞こえたけど、それと同じように、とても変だった。

まるで、私が英語の絵本を声に出して読むときに似ていて、何の抑揚も感じなかった。

私はそこで初めて男をちゃんと見た。

やはり父より背がひよろつとして高くって、この間みたオズの魔法使いの絵本にかかれていた、かかしにそっくりだった。

幼い私は、もうどうしていいかわからず、その幼さのまま痼癬をおこしたかのように、大声を出した。

「絶対ダメ、私が楽しくないもん。私がおもしろくないもん。そんなのダメ！みんなが楽しくなきゃ絶対ダメ！」

支離滅裂な幼い子供の言葉に男は何を思ったか、その大きな包丁を持ったまま、私に目線をあわせて、しゃがみこんできた。

興奮状態にある私は、その時、男を怖いともなんとも思わなかった。

私と男はじっと目を合わせていた。

私は男を見ながら、なおも楽しくないのはダメ、と小さな声で言い続けた。

どのくらいたったろう、男はふわりと笑うと、「じゃあ、俺の初めてのオトモダチだね。遊ぼう。」

そう言って私の頭を撫でて、私の手をつなぎ歩き出した。

そのまま私も何が何だかわからずに、ふらふらと、今おもえば、酸欠状態みたいだったんだと思うけど、ふらふらと男にうながされるまま、その部屋を自然に出てしまった。

思い鉄製のドアがバタンとしまる音で、びくつとした私は、その音で大事な事を思いだした。

みんながまだあの恐ろしい部屋にいるという事を。

私は男とつないだ手を放して戻ろうとしたけど、つながれた手はびくともしなかった。

男が「何して遊ぼうか？」とニコニコして話しかけるのに、お友達がまだ中にいるから出して、と頼んでいた。

男が不思議なガラス玉のような感情のない青い目で、私を再びじつとみつめる。

「あのね、大勢で遊んだ方が楽しいんだよ。ほんとだよ。」と私がドアを指さしていると、首を一度かしげた男は、また怖いと感じるあの部屋で包丁を振り上げた時のような不思議な表情になり、あのドアをじつとみつめた。

私は男の腕を引っ張りながら、2人じゃダメ、ホントだよ、と、泣

きそうになりながら必死に繰り返した。

私が自分からこの男に初めて触れた瞬間だった。

すると男は私がつかむ腕を、本当にじっとじっと見て、やがて反対の腕を持ち上げると、私の頬に人差し指でそっと触れ、何度もなぜていく。

何かを確かめるように、しまいには手の平全体で私の顔を撫でていく。

それはとてもひんやりとした温度の感じさせない手の平だった。

やっと男が私の手を取って引き返してくれた時、重いドアを開けて、急いで戻る私がみたのは恐怖に錯乱する台の上の女の子と、うつろな顔をした子どもたちだった。

第17話 過去？

それからは少しずつ少しずつ、恐れながらも男に対して、私達は慣れていた。

もっぱら男と話すのは私だけで、男も話しかけるのは私だけだったけど。

相変わらず灯りのない部屋だけど、けれどもう連れていかれる子がない、その事実だけが、私達を理屈ではなく本能で心からほっとさせた。

やがて残った私達はいつも身を寄せ合っては片隅で子猫のように、いつも団子のようにくっついていくようになった。

前みたいにバラバラで片隅にいるのではなく、自分たちの意思で一緒にいた。

そうしてアニメの歌や話をしながら、感覚がない長い1日を過ごしていった。

今思えば、幼い私達がアニメ以外はお互い口にしなかった、そのところその異常さがわかる。

そうして、他の事は、例えば喉がかわいたとか、お腹がすいたとか、さびしい、熱いね、などの会話は、自然とボディランゲージで行われるようになっていた。

やがて時々男が来ては、いつの間にか外の広い庭に連れ出してくれ

るようになり、最初はそれも夜ばかりだったけど、暗闇になれていたら私達には外の闇でさえ充分明るいもので、それをととても喜んだ。

男と何もするでなくボーッとしたりしていたけど、徐々に慣れ始めると、遊びたくなって、鬼ごっこしたりするようになった。

男は黙ってそれを見ていた。

そこでも男が話すのも、その相手をするのも私だけだったけど、他の子がたとえばトイレにいきたいなどのお願いをするのに、男には言えず、まして男の注意が自分に向けられるのが怖い他の子たちが、私に目で訴えてくるので、男がいる時には、いつしか私達は、アイコンタクトのみでやりとりするようになっていた。

そういう風に過ごしているうちに、1人の男の子がひっきりなしに腕をかくので、そこがひどくなったことがあった。

前ほど暑さに苦しんではいけないけど私達はきたきり雀だったし、髪はおろかもはや自分から匂う悪臭にもなれてしまっていたが、やはりダニに喰われる痒さには、泣きたくなった。

私が同じように、そのかゆさにどんよりしてると、ある日男がそれを聞いてきた。

「かゆくて辛い。」

その答えを聞いた男は、驚いたように私を見て、私をかかえると私を連れてその広い庭を横切って、別の建物の前まで連れてきた。

他の子達もわけがわからぬまま、必死で男と私の後をついてきた。

今までいた倉庫みたいな建物でなく、そこは平屋の大きな建物だった。

今でも初めて見た、その屋根の赤茶色のペンキのはげかった屋根の上のブリキの風見鶏は私の夢にいまだにでてくるくらいに印象深いものだった。

男は私の手を引いて、何のためらいもなくその家に入っていた。

私は私と男に必死でついてきたみんなを振り返り、アイコンタクトで大丈夫そうだと伝えた。

それに不安そうに遠巻きにしていたみんながほっとして、足早に私達においていかれまいとあわててかけよる。

そうして男に新しい場所に連れてこられた私達は、どのくらいぶりかのお風呂やシャワーをそこで浴びる事ができた。

はじめはこわごととみんなでシャワーに入ったが、その今まで忘れていた熱いお湯を贅沢に浴びると、子供心にも歓喜の心がわきあがってきた。

やがて声を上げてわらいながら、そのお風呂の時間を楽しんだ。

脱いだ洋服はあとかたもなく処分されたが、人数分のバスタオルをまいて私達は風呂から出て、そこに立っていた。

自分たちで何の判断もできなかったから。

私達はそこここにもとまされている灯りに心を奪われていた。

私達の中から灯りという概念はとうに消えていたから。

だから久方ぶりに見るそれらの灯りは、まるで魔法の国にきたみたいな気分になされた。

気持ちがあひどく高揚し、私達はただクスクスと笑い合った。

やがて男が私を呼び、みんなでそこにいくと、そこには焼きたてのハニートーストとミルクが人数分用意されていた。

男が促すので私達はバスタオルのまま、椅子に座るのももどかしく、そのハニートーストにかじりついた。

その1枚を必死に食べ終わり、指につく蜂蜜や口の周りをみなペロペロと子犬のようになめまわしていると、男がはじめて私を見て声を出して笑った。

何故か私達もクスクスと笑った。

その夜から、私達は普通にその家で暮らし始めた。

第18話 過去？

その家での暮らしは不思議なものだった。

声を出さずに会話する私達。

唯一男が会話するのは、私だけ。

私達はそれぞれ新しい名前をつけあった。

「light」それが私の名前、それは私に男がつけた名前。

男の名前は私がつけた。

あの男はまるで黒だと、誰かが言って、いつか黒の言葉をわかるだけ言いあったことがある。

それを覚えていた私は日本語で「クロ」と男につけた。

男はそれを大変喜んだ。

私達はその家で夕方から外に出て遊び、月明かりでする影ふみ遊びやカードなどで一緒に男と遊ぶようになった。

けれど、たまに、本当にたまに、そこに部外者が迷い込むことがあった。

貧乏旅をするお兄さん、ドライブで迷い込む人々、それらの人は次の日には姿を見せなかった。

そういうときは私たちは庭の向こうの倉庫をみないようにしていた。庭の片隅でかまきりが他の昆虫を食べるのを見るまでもなく、私達の周りには生と死がはつきりとしてあるのを知った。

「クロ」がいつも私に触れているようになったのはいつからだか覚えていない。

確か風邪で熱を出した時、その後から「クロ」はいつも私の傍にいろようになった。

私がいなくなりそうで怖いと大人の癖に泣いた「クロ」。

私が庭で座って草の冠を作っている時に、大きい体で私のひざにしがみつくようにして、じっとしている「クロ」。

私がちゃんとご飯を食べているか、じっと見つめ続ける「クロ」。

トランプの神経衰弱で、わざと私にカードの数字をわかるようにする「クロ」。

それも同じ「クロ」だった。

ある日、「クロ」の飼っている大きな犬が子犬を生んだ。

私達はその子犬をじっと見ていた。

あまりにじっと私たちが、私が心を奪われているのを見てやがて我慢ができなくなった「クロ」が飼っていた犬を全て、私たちの目の

前で殺しつくした。

人間離れしたスピードで、あの動きの速い親犬さえも殺してしまった「クロ」に、私は怒った。

本当に怒った。

「嫌い、大嫌い。」と泣きながら。

「ごめん、ごめんなさい。」と意味もわからず謝るクロに、その時私が言ったのは、「仲直りなんかしない。」

「ちゃんとごめんなさいしなきゃ仲直りなんてしない。」という言葉葉。

そうしてクロは、警察に電話して自首をした。

警察がやってきた時「クロ」は機嫌がよかった。

私を見て夢見るように微笑んだクロ。

それから、それから……。

やがて私達はそれぞれの親の元にカウンセラー施設から1年を過ぎたころ戻された。

けれど私や、私達や親たちとは、もはや寄り添う隙間さえなくなっていた。

他の子達はそのまま全寮制の寄宿学校へ向かった。

私もまた日本の祖母の元に送られた。

それはそうだろう。

確かにあの当時の私達は「クロ」同様、異質な存在になっていたから。

その眼差しは子供らしくなく、深い深淵をたたえ、親たちは自分の子供たちのそれに向き合う事などできなかった。

第19話 変わらぬ日々

あの人がどうやら日本にいるらしい事がわかったけど、それで私にはりついている人々は、がっかりしているんじゃないだろうか。

警察の人も、負傷したあの男の部下も。

楽しい夏休み終盤の友人たちとの旅行も、何やかやと理由をつけ不参加にして、2人片時も離れずにいる身辺警護とは名ばかりの見張りの刑事さんも、ほら、安全大国日本だもの、いつまでもついているのもまずいらしく、何の成果もないんだもの、その方たちも二期がはじまって2週間もすれば、いなくなった。

陰険メガネが何を考えているか知らないけれど、表だっては、私に平穏の日々が戻ってきた。

ただし、私は少しずつ少しずつだけど草食動物の生き残るためのカンを取り戻すべく動き始めた。

表だっては、ちょっとかつこ悪い気がして体を鍛えになんていかないけど、だってねえ、絶対監視されてると思うもの、そんな中護身術なんて習いにいくなんて、超恥ずかしいもの。

だから朝と夜、お風呂の中で息が続くまで、繰り返して潜ってじっとじっと弧の世界を味わうの。

その水の中の小さな世界にどこまでも沈み込み思いを沈殿させながら。

なれてくるに従い、ひどく外の世界に敏感になってくるのがわかる。

あの日々のように、それに近づくように。

けれど、あの時と違ってここは自由という計り知れない広さがあり、自分の両手で足りたあの頃とは違い、ため息が出そうなくらい、守れるなんてとうてい思えない。

だからせめて自分と数少ない友人をあの狩人から逃げられるように、耳をすまし目を開きいつでも駆け出せるように、と思っている。

生き物は簡単に壊れる。

それはしっかりとわかっているから。

そしてあの人がもうじき来るだろう事も、ちゃんとわかっている。

あの人は、クロは何でもないように、あっさり自首したけど、あの単純に思える言葉や行動がそのままのものじゃなかった事も、今の私には理解できる。

だってあのクロと私が名づけた男は、いつだって目が冷えていて、その暗い底から、こちらを大人も子供もなく試していたから。

あの人は確かに人間、いや、生き物の持つ感情など何一つ持っていないんじゃないかと思う。

何のきまぐれでか檻に入り、また出てきた彼。

彼を研究した人達は、彼に首輪をつけたのが私だと言うけれど、と

んでもない、彼はたった一つの孤高の生き物で、首輪などつけられるようなカワイイ生き物じゃない。

あの時期の彼は、人として慈しむものの代表の子供達を殺すことに興味を覚えたにすぎず、きっとそれ以前にもいろいろと気ままに試していたはずだ。

考えたくもないけど。

それは誰にも言った事はないけど、確信してる。

今は、今は……、私で遊ぼうとしてる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7695t/>

閉じた環

2011年10月7日12時44分発行